
仮面ライダーザン 剣客稼業

朽磨呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーザン 剣客稼業

【Nコード】

N7191Y

【作者名】

朽磨呂

【あらすじ】

ここは、とある世界に存在する地区「佐神市」

この町で便利屋を構える青年「諫山誠也」

普段は入った依頼をこなし、時間が空けば猫と遊び、時に町へ繰り出す。

そんな彼のもう一つの顔・・・それは町の守護神「仮面ライダー」だった。

無双の剣客が今、町を駆ける！

プロローグ - 友からの手紙 - (前書き)

まず、まだ仮面ライダーは登場しません。
それから主人公もです。

これはプロローグですので何卒、ご容赦くださいm ((m

ブローグ - 友からの手紙 -

びっくりしたよ、居酒屋で飲んで帰ろうとしたらいきなり変な音・
・何かが倒れたみたいなの？でかい音がするからさ。

気になって音が聞こえた方に行ってみたら、なんだか変なんだよ。
一瞬真つ暗の道に綺麗な青白い線が浮いてるのが見えてね。

周りで青いのがキラキラしてたなあ。

あと緑の光ったのが2つ、丁度人の頭くらいの高さのところに浮いてた。

怖くはなかったね、実際なんにもなんなかったし。

ああ言うのを人魂って言うの？

「ある男の証言」

ここ最近、地下から不審な音が聞こえるって苦情がありましたね。
あんまり多いものだから、私、見に行かざるを得なくなっちゃったんです。

マンホールから下水道に降りたら、なんか酷い臭いがして・・・まあ下水なので当たり前ですな。

5分ほど歩き回りましたが何もないので、帰ろうとしたところです。
何か柔らかいものを踏みまして。

ライトで足下を照らしたら、でっかいトカゲみたいなのが死んでましてね。

犬くらいあったんです、びっくりしてライト落としてしまいました。
そんで出会しちゃったんです。

緑の鋭い眼が光ってました、片方の眼だけで野球ボールくらい、大きさはそれくらいなんですけど・バナナみたいな形してたなあ。

まあバナナよりは直線だし尖ってましたがね。

よく見ると人型の何かがいるんです、で気が付くと事務所で寝てましたね。

服が臭かったので夢じゃあないですよ。それからライトも無くなつてました。

誰にも言わんで下さいよ!?

「下水管理員の告白」

と、言うわけでこの件を君に頼みたい。

僕は偶然ここに仕事に来ていたから、今までは調べられた。

でも、任期が終わって今は次の職場だ。

また偶然ここに仕事で来れるとは到底思えない。

だったら、そこに住んでいる君に調べてもらえばいい、そう思ったのさ。

勿論、報酬は用意する。

君は友人からも報酬を取るんだからがめついよ。

つまり、依頼内容は「佐神市内に出没する怪人物の正体を突き止める」こんな感じだね。

ちなみに上の文は僕が町にいたときに自力で聞き出した情報さ。捜査の役に立てば嬉しい。

出来れば、2週間くらいで調べて欲しい、気になってしょうがないんだ。

僕自身があれを見てなきや、こんな依頼しないんだけどね。

それでは、改めて仕事を頼もう。

無事を祈る（冗談）

「親愛なる友、矢崎徹平より」

ブログ - 友からの手紙 - (後書き)

みなさん今晚は、朽磨呂です。

この度は本作「仮面ライダーザン 剣客稼業」をお読みいただきありがとうございます。

まあ、まず皆さん絶対思われたこと。

「なんだこのつまらん話は・・・」

なんて言っただって手紙の内容だけ！これは聖徳太子も寝耳に水！（ん？）

まだブログですから・・・言い訳ですね、ごめんなさい。

ただ、しつこいですがこれはブログ、まだ失望するには早いです！（期待している人がいるかはともかく）

まずは一歩、これからこの作品をよろしく願います。

第一話「愛猫剣客いざ参る！」（前書き）

さあ、漸く完成第一話です！

第一話「愛猫剣客いざ参る！」

「まったくあいつめ、調子の良いことを」

諫山誠也（いさやま せいや）は、友人・矢崎徹平からの手紙を読み苦笑いした。

ここは誠也の経営する便利屋「風花（かざはな）」の事務所だ。人員は彼一人、誠也は人を雇う気は無い。

それでも仕事が片づくのは、誠也の手腕故か、はたまた仕事が少ないだけか。

「友人からも金を取るからがめつい？ 当たり前だ、そうしなきゃ喰っていけないんだぜ？」

この辺はまだ笑っていられる。ただ、依頼内容が問題だった。

内容は「佐神市内に出没する怪人物の正体を突き止める」

これには頭を抱えざるを得ない。

「どうしよっかね・・・ん？ 黄泉？」

頭を抱えていると、誠也の足下に黒猫が纏わりついてきた。

飼い猫の黄泉だ。

つい三ヶ月前まで、彼女は捨て猫だった。

しかし、偶然近くを通りがかった誠也が食事を与えたため懐いてしまい、今は誠也が養っている。

誠也が落ち込んだ時や、困っている時には励ましてもくれる、独り身の誠也には大切な家族だ。

「おーよしよし、お前はご主人の心労がよくわかる良い猫だなあ、可愛いやつめ」

頭を撫でてやると、黄泉は一声鳴いた後、誠也から離れていった。

「困ったが・・・まあ、何とかなるさ。じゃあ気晴らしにちよいと町に繰り出すか！黄泉、留守番してろよー」

誠也は事務所を出ることにした。

何故か、腰のベルトにおもちゃの刀を差して・・・

――――

はじめにこの便利屋について説明しよう。

店の名前は「風花」

店名の由来は開店当時に誠也が好きだった歌から、つまり適当に付けた名前である。

営業を始めたのは去年の終わり頃。

経営者は諫山誠也、19歳。

事務所は縦に長い二階建ての上階にある。

一階は少し前まで店があったらしいが今はなくなり、現在は事務所のガレージに改装されている。

事務所の外の扉には「捜し物、お掃除、なんでもござれ！（危険な仕事も応相談）」とある。

「さてさて、どこ行こつかなーつと」

誠也は事務所を出た後、商店街をぶらつきはじめた。
八百屋に魚屋、それから揚げ物屋などがある。

（黄泉に何か魚を買っていつてやるか）

誠也は魚屋の店主に声を掛けた。

「店主さん、安めのを三匹下さいな」

「お、諫山さん！・・・その様子だと儲かってないね？」

「ええい、言ってくれるねー・・・まあ安めのもつて言っちゃったからね」

誠也と店主は笑いあった。

この町で諫山誠也を知らない人間は珍しい。

当然だが、腰におもちの刀を差した人物が目立たないわけがない。ある意味、彼はこの町の有名人だった。

「じゃあね、また買いに・・・次は高いのを！」

「ははは、お越しになるのを待ってますよー」

誠也は秋刀魚を三匹入れた袋を持ち、途中喫茶店に立ち寄ってから家路についた。

「おーい黄泉ちゃん、魚だぞー」

するとソファアの陰から黄泉が走ってきた。

「魚」、黄泉はこの言葉に反応する。賢い猫だ。

誠也は秋刀魚のうち一匹を黄泉に与えた後、残りを冷蔵庫に入れ椅子に腰掛けた。

「やっぱ、今日は仕事が入らないな」

それから誠也は黄泉と遊び、資料の整理を行い、ラジオを聴き、い

つの間にか三時間がたち五時になった。

「結局来なかったか・・・黄泉、公園行こう」

公園の木々や遊具は夕日に照らされ美しかった。

誠也はこの時間が好きだ。

夕日の匂いを感じると、いくら重大な問題を抱えていても和やかな気分になれる。

誠也はベンチに腰掛けた。

「黄泉、そんなに長居はしないんだから寝るなよ？」

黄泉が誠也の膝に乗った。

本当はこのままじっとしていたい。だが、そうもいかない。

十分ほど経った頃、誠也は帰るために黄泉を見た。

しかし、黄泉は寝息を立てていた。

（これほど気持ちがいい夕日なら無理もないか・・・可愛いな）

誠也は黄泉が起きないように抱き上げ、事務所に戻った。

――――

事務所に帰り着いた誠也は、まず黄泉をソファーに寝かせた。

その後、食事の用意を始めた。

今日は秋刀魚の塩焼きだ（途中、黄泉が起きてきたので少し分け与えた）

食事が終わったのでテレビを見たり、黄泉を構ったり、木刀を素振りしたりする内に時間は過ぎた。

時刻は午後八時。

再び黄泉を寝かせると、誠也は事務所を出た。
一階のガレージに行き、バイクに跨がる。
誠也は港に向かった。

港は静まりかえっていた。

誠也はバイクを止めると、防波堤まで歩いた。

波は穏やかに揺れている、いたって自然な光景だ、不自然なものは見当たらない。

しかし、今日はここに奴らが来る・・・誠也には判っていた。
突然、海面が泡立った。

次の瞬間、緑の何かが水中から飛び立ち誠也のすぐ近くに降りた。

「それ」は濃い緑のぬらぬらした肌で、身体はほっそりとしていた。
薄く透けた羽、蛇に似た顔、鋭い爪。

「案の定、今日の相手は蛟（みずち）か」

蛟は「ギユウギユウ」と気味の悪い声を発しながら誠也に近づいた。
しかし、誠也に怯えは微塵もない。

誠也は着ていたジャケットの内ポケットから奇妙なものを取り出した。

それは、中央に鍵穴が付いた丸みを帯びた長方形の黒い箱のようなもので、銀色の鍵穴が目立っていた。

「私を喰う気だな？それは困る」

誠也は奇妙なもの「ライダーバックル」を腰に付けた。

すると誠也の腰に純白のベルトが巻かれる。

次に彼はおもちゃの刀を鞘ごと腰から抜き、左手に持つ。

誠也はポケットから取り出した小さな物体「トランスキー」をバック

ルに差し込んだ。

次の瞬間、鍵が一瞬で取り込まれ、バックルが変化した。縁に銀色の模様、中央に金色の紋章が現れ、若干大型化した。

「被害を出すわけにはいなくてね、・・・変身！」

誠也は刀を一旦左腰に引き付けてから前方で水平に構えると、変身ポーズをとり叫んだ。

誠也を緑の光が包み、彼の身体に黒の鎧が重なった。

4 | | | | | | | | | |

緑色の鋭い複眼。

全体的に黒、その黒を赤と白が彩る装甲。

腰に付いていたおもちゃの刀は真剣「水晶刀・岩斬り」に変わっていた。

「おい、今ならまだ見逃してやるが、どうする？」

しかし、蛟は誠也に向かって走り出した。

判りきった結果ではあったが、誠也は残念そうに肩を竦めた。

「やれやれ・・・冥土の土産に聞いておけ。我が名は、仮面ライダーザン！」

誠也「仮面ライダーザンは、蛟があと四歩ほどまで近づくと、おもむろに鞘から刀身を抜き放つ。

刀身はまるで水のように透き通り、そして美しかった。

ザンは間を見計らい、上段に構えた岩斬りを一気に振り下ろす。光の粒子が宙を舞う。

後少しでザンに触れるはずだった蛟の身体が、次の瞬間無惨にも二つに別れた。

ザンは鞘に刀を収めた。

しかし、まだ戦いは終わっていない。

海面から次々と蛟が飛び出してきた。一匹ではなかったようだ。

ザンは慌てずに居合いで空中の蛟を三匹仕留め、残った蛟を数える。

「・・・ふむ、後七匹か。手間を掛けてはいられんな」

ザンはベルトからバックルを外した。

バックルを左手に持ち、バックルの裏側を刀身に軽く当てると刃の先まで滑らせる。

するとバックルが触れた辺りから刀身が青く光り始めた。

? drive?

「さて・・・」

バックルから電子音声が響いた。

ザンは蛟達が近づくのを待つ、引き付けてから討つ気だ。

一番近い蛟が爪で攻撃してきた。

ザンは蹴りで蛟の腕を弾き、後退させる。

「はあ！」

ザンは後退した蛟に張り付くと、刀を横に振り回した。

何が起こったのだろう、振った途端に刀身が明らかに長くなった。

エネルギーを消費することで刀の攻撃範囲及び切れ味を強化し、広範囲を斬り伏せる必殺技「光刃」

ザンを囲んでいた蛟が容赦なく横なぎに斬られ、辺り一帯に粒子が

舞い散る。

「錆になれ」

最後に、ザンは自分が張り付いていた蛟を刀の柄で突き後退させると、三度斬撃を浴びせ収刀した。

刹那、斬られた蛟達の身体が地に崩れ落ちた、いわゆる「殺陣（たて）」である。

誠也は変身を解除すると蛟達の遺骸に合掌し、何食わぬ顔でバイクに跨がり町へ向かう。

偶然見つけた屋台で焼き鳥の皮を食すと、少し遠回りで事務所に戻った。

時刻は午後九時三十分

事務所に帰ると誠也はまず風呂に入った。

それから歯磨きを忘れずに行い寝室へ。

寝間着に着替え、布団に入る。

すると寝室の扉を引っかく音と鳴き声が聞こえた。

「黄泉、寝てなかったのか・・・待ってる今開けるからな」

誠也は布団から出ると、扉を開けた。

黄泉が室内に入り誠也の足に纏わりつく。

「お前なあ、まったく・・・」

溜め息を吐くものの嬉しそうな誠也。

布団に入ると黄泉も入ってきた。

「こら、舐めるな、眠れないだろ」

誠也が黄泉を優しく抱きしめた。黄泉が鳴き声を上げる。
そして、便利屋「風花」の一日は漸く終わった。

第一話「愛猫剣客いざ参る！」（後書き）

皆さんこんにちは、朽磨呂です。

お読みいただきありがとうございます。

なんとか第一話、完成しました。

なかなか設定考えるのに苦戦しまして、予定より遅い完成です。

まず何で詰まったか。

便利屋の名前です。

探偵なら「諫山探偵事務所」で済んだのですが。

それから変身ポーズ、伝わったろうかと心配です。

初めは仮面ライダー1号のものにアレンジを加えてみようかなと思ったのですが、結局オリジナルに落ち着きました。

これからもよろしくおねがいします。

第二話「暗闇の鍵（前編）」（前書き）

久々に更新しました。

戦闘シーン無し、あまり楽しめませんよね。

第二話「暗闇の鍵（前編）」

誠也は起床すると、まず台所で朝食を作ることにした。

今日は味噌汁にご飯、それから沢庵、と和食の典型といった感じだ。誠也は味噌汁が煮え、ご飯が炊けるまでの間、昨日届いた友人からの手紙を読み直した。

（上の2つの文、特徴的にどう考えてもザンのこと言ってるよなあ・
・）

手紙の内容に含まれていた目撃談、どちらも間違いなくザンのことを見たのだろう。

そもそも、下水道の件については誠也にも覚えがあった。

下水道に出没した妖魔を仕留め帰ろうとしたところ下水道の管理人が倒れており、仕方なく気絶した彼を管理人事務所に運んだのだ。

（どうしようか、矢崎の奴はどうしてこうも面倒な依頼を・・・）

そこへ、黄泉が起きてきた。

まだ眠そうだ。

「おー黄泉おはよう、さあおいで」

黄泉を膝に乗せ、依頼について考えるうちに味噌汁は煮え、ご飯は炊けた。

「まあ、どうにでもなるさ」

誠也は朝食をとるために動き出した。

朝食を食べ終わった誠也はまず私服に着替え、それから食器を片づけた。

その後、事務所の椅子に腰掛け客を待つ。

勿論、その間ずっと椅子に座っているだけのはずもなく、黄泉を構ったり事務所を掃除したり、ラジオを聴いたり本を読んだりしていた。

11時頃だった。

事務所のドアが開き、1人の男性が入ってきた。

「失礼します、こんにちは」

「ようこそお客さん、こんにちは。まずお名前は？」

「古畑です、古い畑で古畑と書きます」

男性は茶髪で、背広姿だった。

年齢は40に入った辺りか。

「はい、古畑さんですね、今回はどのようなご用でしょう？」

「鍵を捜していただきたいのです、金庫の」

誠也は依頼の内容を聞いた。内容によっては請け負い難いものもある。

「ふむ、まずはお掛けください」

誠也は古畑をソファに掛けさせた。

「鍵ですか、どこで無くされました？」

「どこで無くしたか判らなくて、申し訳ない」

誠也は唸った。

無くした場所が判らないとなると探しようがない。

「いいえ・弱ったなあ、流石にそれだけと厳しい・もう少し詳しくお願いできませんか？例えば、いつまで手元にあって、いつ無くしたことに気がついたか、お茶をどうぞ」

誠也は依頼内容などを手帳に書き込みながら聞いた。

「いえ、お構いなく、えーと・・・あ、最後に鍵を見たのは一昨日の午後3時頃で、無くしたのに気づいたのは午後9時頃です」

誠也は更に聞く。

「その間に行った場所は覚えていますか？」

「はい、案内も出来るかと」

「では、案内願います。場所さえ判れば後は私だけでも大丈夫ですからね」

誠也は外出で帰りが遅くなった時のために黄泉の餌を用意し、それから

「ご用の方は電話番号を書いた紙をポストにお入れください」と書いた札を事務所のドアの外に掛けた。

「さて、案内頼みますね」

「お願いします」

2人は事務所を後にした。

2人はまず、古畑が最後に鍵を確認したという地下鉄のプラットフォームを訪れた。

「御免！駅員さんちょっと」

「どういたしました？」

「落とし物で鍵が見つかってないかな？」

「少々お待ち下さい」

駅員が引っ込んで、少しすると数本の鍵を握って戻って来た。

「幾つかありますが、この中にございますか？」

「古畑さん、どうです？」

「残念ながら・・・」

やはり、そう簡単に見つかりはしない、というか今見つかったらかなり楽な仕事だ。

そんなに楽な仕事はそうそうあるものではないことを、誠也は百も承知している。

誠也はあちこちを調べだした。ベンチの裏、線路の上、屑籠の中。しかし、見つからない。

「駅員さん、ありがとね。古畑さん、次に行きましょう」

誠也はそう言うと、古畑と次の場所へ向かった。

この場所に来た時からの、何者かの視線を感じつつ誠也は行く。

その後、古畑の案内で様々な場所を巡ったが、鍵は結局見つからなかった。

「今日は諦めましょうか、何時までに見つけられればいいんです？」

「今週中にお願いでできれば助かります」

「わかりました、ところで依頼料金ですが後払いで構いませんよ。えゝといくらくらいになるかな・・・」

「今のところ、5万円お支払いしようと考えております」

思いがけない金額に、誠也は驚愕した。

「ちょっと待って下さい、鍵一つ探すのにその料金ですか？」

「少ないでしょうか？」「とんでもない！」

ここにきて誠也は、金庫の中身が気になった。

5万もかけて探す鍵だ、大層な物が入っているに違いない。

「失礼ながら、金庫の中身をお教え願えませんか？」

「おお、私こそ初めにお教えするべきでした。中身は父の遺産です」

誠也は納得した。

遺産というからには金庫には大金が入っているのかもしれない。

「父が亡くなる前に金庫の鍵を譲られたのですが、開ける前にこの通り無くしてしまいました」

「なるほど、わかりました。後は私にお任せ下さい」

「では、改めてお願いします」

2人は公園で別れた。

誠也は腕時計を見た、時刻は午後3時だ。
雲行きが怪しい、雨が降り出しそうだ。
誠也は事務所へ向かった。

誠也が事務所へ着いた途端に雨が降り出した。
事務所に入ると、誠也を黄泉が迎える。

「黄泉ただいま、寂しかったか？」

誠也は椅子に腰掛けた。

手帳を開き、今日古畑に案内してもらった場所、一昨日彼が取った
行動を確認する。

誠也は紅茶を啜り、不敵な表情で呟いた。

「ま、だいたい見当は付いてるんですがね」

第二話「暗闇の鍵（前編）」（後書き）

みなさま遅くなりました、ごめんなさい。

話の構成を考えるのに手こずりまして（-_-;）

さて、今回は戦闘シーン無し！

お許しを・・・

ちなみに誠也の飼猫「黄泉」

さて、どこから取ってきた名前でしょうか？

ヒント・誠也の性「諫山」、某アニメからです。
次回をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191y/>

仮面ライダーザン 剣客稼業

2011年12月16日19時02分発行